

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		安田雅晴						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	NaClを添加した培養液がイチゴの生長に及ぼす影響 (第2報) 果実及び植物体におけるNa含量													
発表者名 (原著)	安田雅晴、越川兼行 (: 発表者)													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成16年度春季大会研究発表 (宇都宮大学)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2004	年	4	月	4	日						
誌上	誌名	園芸学会雑誌 第73巻 別冊1												
	巻号等	Vol.	73	No.	1	p.	107	~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元	園芸学会												
	分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告				2. 学術図書 4. その他							
<p>(要旨)</p> <p>イチゴ「濃姫」の「岐阜県方式」高設栽培において、NaClを添加した培養液が果実及び植物体のNa含量に及ぼす影響を検討した。培養液にNa2me/l相当量、及びNa4me/l相当量のNaClを添加して栽培した結果、果実、植物体のすべての部位でNa含量が増加した。培養液のNa濃度が高いほど、Na含量の増加が大きかった。また、果実におけるNa含量は、2~3月に急激に増加した。この時期は、前報で報告した果実糖度の高まる時期と一致することから、Naが果実糖度に影響を及ぼしていると考えられた。</p>														
(キーワード) イチゴ、NaCl														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		新川 猛						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	機械油乳剤によるカキの花芽形成の制御													
発表者名 (原著)	新川 猛													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成16年度春季大会 (宇都宮大学)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2004	年	4	月	4	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 ^(注)	==	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告			4. その他
(要旨)														
<p>カキ‘富有’の花芽形成初期にあたる6~7月に、機械油乳剤(97%)を散布すると翌年の花芽の着生が著しく減少する。薬剤散布の前後で光量子密度を段階的に変化させて、光合成速度を測定したところ、平均で約17%まで抑制されていた。散布40日を経過しても散布前の約65%までしか回復しておらず、長期間にわたる光合成速度の抑制が、花芽の形成に影響しているものと考えられた。一方、散布当年の果実品質については、平均果重及び糖度の低下が認められた。</p>														
(キーワード) カキ、機械油乳剤、光合成速度、花芽														

試験研究機関名		農業技術研究所					氏名		棚橋寿彦					
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	鶏ふん堆肥の窒素含量に基づく肥効推定法													
発表者名 (原著)	棚橋寿彦・矢野秀治													
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	日本土壤肥料学雑誌												
	巻号等	Vol.	75	No.	2	p.	257	~ p.	260	西暦	2004	年	4	月
	出版または発行元	日本土壤肥料学会												
	分類 ^(注)	<u>1</u>	1. 学術論文					2. 学術図書						
		3. 講演・報告					3. その他							
<p>(要旨)</p> <p>鶏ふん堆肥の窒素無機化率は鶏ふんの窒素含量と高い正の相関がある。 この関係はほ場レベルのでも妥当性が認めれた。 従って、「鶏ふん堆肥の窒素無機化率% = 10 × (N% - 1)」を基に窒素肥効を推定し、施肥窒素を減肥することが可能である。</p>														
(キーワード) 鶏ふん、窒素含量、窒素無機化、窒素肥効														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		青木克典						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	ハウレンソウにおけるタネバエの防除法													
発表者名 (原著)	青木克典													
口頭	発表会名 (場所)	関西病虫草害研究会 (滋賀県大津市淡海ホテル)												
	主催機関	関西病虫草害研究会												
	発表月日	西暦	2004	年	5	月	28	日						
誌上	誌名	関西病虫草害研究会報												
	巻号等	Vol.	46	No.		p.	101	~ p.	102	西暦	2004	年	5	月
	出版または発行元													
	分類 ^(注)	<u>3</u>	1. 学術論文					2. 学術図書						
		3. 講演・報告					4. その他							
<p>(要旨)</p> <p>タネバエに対し防虫ネットの1mm以下の被覆は有効で有機質肥料散布直後に播種し、直ちに1mm以下の防虫ネットで被覆すれば被害は回避できる。また、タネバエの発生しにくい有機質肥料として有機50%毎作やばかした肥料であるfermen園芸用、ぼけさく1号、バッチリ753が有望であり、薬剤防除ではダイソノ粒剤の防除効果が高かった。</p>														
(キーワード) ハウレンソウ(雨よけ栽培)、タネバエ、防虫ネット、有機質肥料、薬剤防除														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		天野昭子						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	残留農薬検査キットの現場活用への取り組み													
発表者名 (原著)	天野昭子、平 正博													
口頭	発表会名 (場所)	関西病虫害研究会 第86回大会 (大津市)												
	主催機関	関西病虫害研究会												
	発表月日	西暦	2004	年	5	月	28	日						
誌上	誌名	関西病虫害研究会報												
	巻号等	Vol.	46	No.		p.	57	~ p.	58	西暦	2004	年	5	月
	出版または発行元	関西病虫害研究会												
	分類 ^(注)	<u>1</u>	1. 学術論文					2. 学術図書						
		3. 講演・報告					3. その他							
<p>(要旨) 本県では農産物の残留農薬自主検査の一手段として、イムノアッセイ法を利用した残留農薬簡易分析キットを現場導入した。初年度はSDI社製のエンバイロガードを対象として測定精度と誤差について検討した結果、現場利用における測定値の精度の許容範囲は、回収率で50~150%程度とするのが妥当と考えられる。また、キットの吸光度測定値を試料中の残留濃度に変換するための計算ファイルを、計算ソフト(Excel)を用いて作成した。この計算ファイルにおいても、先の精度確認の結果をふまえて、(1)残留基準値の二分の一以下(2)残留基準値の二分の一以上基準値未満(3)基準値以上の三段階に分けて結果判定をするように設定した。</p>														
(キーワード) 農薬残留、自主検査、イムノアッセイ、エンバイロガード、														

試験研究機関名	農業技術研究所			氏名	鈴木俊郎									
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	レンゲの播種時期および品種がアルファルファタコゾウムシHypera posticaの被害程度に及ぼす影響													
発表者名 (原著)	鈴木俊郎 松尾尚典 平 正博* (岐阜県農業技術研究所 *生物産業技術研究所)													
口頭	発表会名 (場所)	関西病虫害研究会第86回大会 (滋賀県 大津市)												
	主催機関	関西病虫害研究会												
	発表月日	西暦	2004	年	5	月	28	日						
誌上	誌名	関西病虫害研究会報												
	巻号等	Vol.	46	No.		p.	95	~ p.	96	西暦	2004	年	5	月
	出版または発行元	関西病虫害研究会												
	分類 ^(注)	1	1. 学術論文 3. 講演・報告			2. 学術図書 4. その他								
<p>(要旨) レンゲの重要害虫であるアルファルファタコゾウムシHypera postica Gyllenhalは1982年に福岡県と沖縄県で初めて発生が確認されて以来分布を拡大し、1999年に岐阜県で初確認され、蜜源レンゲに多大な被害をもたらしている。そのため、レンゲの播種時期を遅くして被害を軽減する耕種的防除法について検討した。試験の結果、遅播により成虫の圃場への侵入時期が遅れ、侵入量も少なくなった結果、産卵数が抑制され、産卵時期も遅くなったため、被害が軽減されたことが確認された。また花数も十分に確保されたことから、岐阜県平坦地において遅播は利用可能な耕種的防除法であると考えられた。</p>														
(キーワード) レンゲ アルファルファタコゾウムシ 遅播														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		渡辺秀樹									
種別	2	1. 口頭、2. 誌上															
題名 (原著)	雨よけ栽培トマトの褐色根腐病に対する還元土壤消毒法の防除効果																
発表者名 (原著)	渡辺秀樹・五十川悦司 [*] ・田畑幸司 ^{**} ・渡邊知文 ^{***} ・峯村 晃 ^{****} ・鈴木隆志 ^{****} ・堀之内勇人・田口義広 ^{*****} (農技研・*岐阜地域農業改良普及セ・**飛騨地域農業改良普及セ・***農業大学校・****中山間農技研・*****農林商工部普及企画室)																
口頭	発表会名 (場所)																
	主催機関																
	発表月日	西暦		年		月		日									
誌上	誌名	関西病虫害研究会報															
	巻号等	Vol.	46	No.		p.	15	~ p.	21	西暦	2004	年	5	月			
	出版または発行元	関西病虫害研究会															
	分類 ^(注)	1	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告				4. その他		
<p>(要旨) 近年、雨よけ栽培トマトで発生が多くなった褐色根腐病に対する還元土壤消毒法の春期および秋期処理による防除効果を検討した。標高450m(岐阜県中津川市)のほ場において、6月上旬は約7日間、10月中旬は40~50日間処理すると防除効果が認められた。また、標高750m(岐阜県丹生川村)のトマト栽培ほ場では、5月上旬に処理を開始し、23日間の処理で高い防除効果が認められた。根の発病程度は処理3年目でも無処理に比較して低く、トマト果実の着果数も多くなり、実用的な防除効果が認められた。</p>																	
(キーワード) 雨よけ栽培トマト、褐色根腐病、還元土壤消毒法																	

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		新川 猛						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	完全甘ガキ品種に対する1-MCP処理の効果													
発表者名 (原著)	新川 猛													
口頭	発表会名 (場所)	平成16年度全国果樹研究連合会・全国カキ流通研究会 (チサンホテル新大阪)												
	主催機関	全国果樹研究連合会												
	発表月日	西暦	2004	年	6	月	3	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 ^(注)	<u>3</u>	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告			4. その他
<p>(要旨)</p> <p>松本早生富有に増加している早期軟化は、細胞壁分解酵素のポリガラクチュロナーゼが収穫時において、異常な高活性を示していることが原因で発生する。ポリガラクチュロナーゼの活性はエチレンに依存することから、エチレン作用阻害剤1-MCPを処理することによって、軟化の発生を約2週間完全に抑制することができる。また、1-MCPを完熟柿に処理することによって、高品質果実を新鮮な状態で保存することが可能となる。</p>														
<p>(キーワード) カキ、軟化防止、エチレン作用阻害剤、ポリガラクチュロナーゼ、</p>														

試験研究機関名	農業技術研究所				氏名	渡辺秀樹								
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	土壌還元消毒による土壌病害防除の現場事例													
発表者名 (原著)	渡辺秀樹・田畑幸司* (農技研・*飛騨地域農業改良普及セ)													
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	今月の農業												
	巻号等	Vol.	48	No.	6	p.	21	~ p.	25	西暦	2004	年	6	月
	出版または発行元	化学工業日報社												
	分類 ^(注)	<u>3</u>	1. 学術論文 3. 講演・報告				2. 学術図書 4. その他							
<p>(要旨) 岐阜県では、1995年度から「ぎふクリーン農業」に取り組んでいる。そこで、近年雨よけ栽培トマトで発生が多くなった褐色根腐病に対する還元土壌消毒法の春期および秋期処理による防除効果を検討したところ、標高450m(岐阜県中津川市)のほ場において、6月上旬は約7日間、10月中旬は40~50日間処理すると防除効果が認められた。</p> <p>飛騨地域における土壌還元消毒の取り組みは、2001年に丹生川村で始まり、2003年には40戸350aと拡大しつつある。根の発病程度は処理3年目でも無処理に比較して低く、トマト果実の着果数も多くなり、実用的な防除効果が認められた。飛騨地域の夏秋トマトにおいて土壌還元消毒法が普及しつつある要因として、定植時期などこれまでの栽培体系を大きく変更することなく導入可能であったこと、褐色根腐病の防除だけでなく同時に基肥を減らすことが可能で、かつ裂果対策にもなりうることなどが大きな要因であると考えられる。</p>														
(キーワード) ぎふクリーン農業、夏秋栽培トマト、褐色根腐病、土壌還元消毒法														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		宇次原清尚						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	キンセンカ属の種間交雑による雑種植物の作出													
発表者名 (原著)	宇次原清尚、加藤克彦、三輪俊貴													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会東海支部研究発表 岐阜大学												
	主催機関	園芸学会東海支部												
	発表月日	西暦	2004	年	8	月	26	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類	==	1. 学術誌、 2. 学会プロシテイング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
(要旨)														
<p>農業技術研究所で選抜・育成した一重咲き <i>C. officinalis</i> (以下キンセンカ) を雌親とし <i>C. arvensis</i> の品種 "冬知らず" を雄親として2001年に交雑し、1個体(以下交雑種)を得た。花径はキンセンカが7.1cm、冬知らずが2.3cmにたいし交雑種は3.7cmで冬知らずの花径の倍近く大きかった。草姿はキンセンカは立性、冬知らずが這性に対し、交雑種は冬知らずに近い半這性であった。フローサイトメーターによる核DNA量測定値はキンセンカが92.3、冬知らず177.2に対し交雑種は152.0であった。冬知らずはキンセンカの2倍のDNA量を有し、倍数性であると考えられたが、交雑種はキンセンカと冬知らずの間ではなく、冬知らずにやや近い量を示した。</p> <p>このように、<i>C. officinalis</i>と<i>C. arvensis</i>は種間交雑が可能で、キンセンカと交雑種、交雑種と冬知らずの交雑による植物体も得ているので、今後、種間交雑による新しい品種の育成が可能と考えられる。</p>														
(キーワード) キンセンカ属、交雑種、フローサイトメーター														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		安田雅晴						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	不織布製ポットによるイチゴ高設ベンチ栽培システムの開発													
発表者名 (原著)	越川兼行・安田雅晴 (: 発表者)													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会東海支部研究発表会 (岐阜大学)												
	主催機関	園芸学会東海支部												
	発表月日	西暦	2004	年	8	月	27	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 ^(注)	＝	1. 学術論文					2. 学術図書						
		3. 講演・報告					4. その他							
<p>(要旨)</p> <p>イチゴ高設ベンチ栽培において、定植作業を省力化した方式(以下、新方式)を開発した。高設ベンチ「岐阜県方式」では、7.5cm浅鉢黒ポリポットで育苗した苗を培地を充填したベンチ栽培槽に定植する。培地量は約1$\frac{1}{2}$l/株で、株間18cm(栽植密度8330株/10a)で定植し、10cm間隔の点滴チューブで給液し、栽培する。新方式は、育苗を4号不織布製ポットで行い、定植はポットの状態のまま、栽培槽内に置くのみで、培地を充填する等の作業を大幅に省力化する。給液は点滴チューブで行い、点滴穴の下にポットを配置する。培地量は約710ml/株で、株間は市販されている点滴チューブの間隔に合わせ20cm(栽植密度7500株/10a)とする。新方式で、収量性を検討した結果、株当たり収量は「岐阜県方式」に比べ4%増加したが、10a当たり収量は栽植密度が低いため6%減少した。また、新方式は秀品率が4%、大玉率が5%高かった。</p>														
(キーワード) イチゴ、不織布製ポット、高設ベンチ栽培														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名	尾関 健							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	露地植カキ樹の冬肥、春肥及び秋肥における窒素の吸収移行													
発表者名 (原著)	尾関健・新川猛・梅宮善章(農研機構果樹研)													
口頭	発表会名 (場所)	平成16年園芸学会東海支部(岐阜大学)												
	主催機関	園芸学会東海支部												
	発表月日	西暦	2004	年	8	月	27	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 ^(注)	<u>3</u>	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告			
<p>(要旨)</p> <p>露地植のカキ‘富有’11年生の冬肥、春肥及び秋肥の窒素の吸収移行について、¹⁵Nトレーサー法を用いて検討した。</p> <p>各施肥時期から収穫期までに吸収された¹⁵Nの利用率は、冬肥は31.6%、春肥では38.2%で、春肥の方が効果的に吸収されることが判明した。また、秋肥は18.9%吸収利用されるが、利用率は低いことが解った。しかし、施肥時期の違いが果実に与える影響は認められなかった。</p>														
(キーワード) カキ、同位体窒素、施肥、窒素吸収														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名	新川 猛							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	袋掛けによる完熟富有ガキの品質と日持ち性向上													
発表者名 (原著)	新川 猛・尾関 健													
口頭	発表会名 (場所)	平成16年度園芸学会東海支部研究発表会 (岐阜大学応用生物科学部)												
	主催機関	園芸学会東海支部												
	発表月日	西暦	2004	年	8	月	27	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 ^(注)	＝	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告			4. その他
(要旨)														
カキ‘富有’の収穫期間の延長のため、袋掛けによる抑制栽培を試みたところ、通常の栽培法の果実と比較して、糖度が1.5度ほど高くなり、果色が良く、果肉硬度が柔らかくなるため、食味に優れた果実となる。しかし、日持ち性が劣るため、エチレン作用阻害剤であり1-メチルシクロプロペン処理したところ、約2週間の間軟化を完全に防止することがわかった。本薬剤の処理により、年内いっぱい生果を供給することが可能となった。														
(キーワード) 完熟柿、軟化抑制、エチレン作用阻害、袋掛け														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		棚橋寿彦						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	鶏ふん堆肥中のアンモニア態窒素存在形態と培養無機態窒素量の関係													
発表者名 (原著)	棚橋寿彦・矢野秀治													
口頭	発表会名 (場所)	日本土壌肥料学会2004年度福岡大会												
	主催機関	日本土壌肥料学会												
	発表月日	西暦	2004	年	9	月	15	日						
誌上	誌名	日本土壌肥料学会講演要旨集												
	巻号等	Vol.	50	No.		p.	161	~ p.		西暦	2004	年	9	月
	出版または発行元	日本土壌肥料学会												
	分類 ^(注)	<u>3</u>	1. 学術論文					2. 学術図書						
		3. 講演・報告					3. その他							
(要旨)														
<p>堆肥中には従来法では抽出されないアンモニア態窒素がリン酸マグネシウムアンモニウム(MAP)と、尿酸水素アンモニウムの形態で存在している。MAPは抽出時のpHを5まで下げると全量抽出されるが、尿酸水素アンモニウムはそれより低いpHで溶解し始める。</p> <p>鶏ふん堆肥中の尿酸はほとんどが尿酸水素アンモニウムで存在しており、堆肥からpH1とpH5で抽出したアンモニア態窒素と高い正の相関がある。</p> <p>鶏ふん堆肥の培養無機態窒素量(30・4w)はMAPと尿酸水素アンモニウムと従来法で抽出されるアンモニア態窒素および尿酸態窒素の合計とほぼ一致する。</p> <p>このことから、鶏ふん堆肥の培養無機態窒素量はpH1とpH5の2段階で抽出されるアンモニア態窒素により推定できる。</p>														
(キーワード) 鶏ふん堆肥、アンモニア態窒素、MAP、尿酸水素アンモニウム														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		矢野秀治						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	家畜ふん堆肥からの塩酸抽出の有用性													
発表者名 (原著)	矢野秀治・棚橋寿彦													
口頭	発表会名 (場所)	日本土壌肥料学会2004年度福岡大会												
	主催機関	日本土壌肥料学会												
	発表月日	西暦	2004	年	9	月	15	日						
誌上	誌名	日本土壌肥料学会講演要旨集												
	巻号等	Vol.	50	No.		p.	161	~ p.		西暦	2004	年	9	月
	出版または発行元	日本土壌肥料学会												
	分類 ^(注)	<u>3</u>	1. 学術論文					2. 学術図書						
		3. 講演・報告					3. その他							
<p>(要旨)</p> <p>牛ふん堆肥・豚ふん堆肥から0.5M塩酸により抽出(1:10)される無機態窒素は、従来法では抽出されなかったリン酸マグネシウムアンモニウム(MAP)を含んでいる。この無機態窒素量は堆積発酵方式の豚ふん堆肥における長期的な窒素肥効と一致し、また、牛ふん堆肥においても短期的な窒素肥効と相関が高い。</p> <p>上記抽出や、鶏ふん堆肥からの1M塩酸を用いた抽出により、リン酸・カリ・石灰・苦土がほぼ全量抽出される。また、本抽出液中のアンモニア・硝酸・リン・カリウム・マグネシウム・カルシウムイオンは小型反射式光度計を用いて簡易に分析できる。</p>														
(キーワード) 堆肥、MAP、窒素肥効、塩酸、小型反射式光度計														

試験研究機関名	農業技術研究所			氏名	猪原由久									
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	イチゴ新品種「美濃娘」の特性													
発表者名 (原著)	猪原由久、越川兼行、安田雅晴													
口頭	発表会名 (場所)	日本育種学会第106回講演会 (三重大学)												
	主催機関	日本育種学会												
	発表月日	西暦	2004	年	9	月	21	日						
誌上	誌名	育種学研究 第6巻 別冊2号												
	巻号等	Vol.	6	No.	2	p.	243	~ p.		西暦	2004	年	9	月
	出版または発行元	日本育種学会												
	分類 ^(注)	<u>3</u>	1. 学術論文 3. 講演・報告			2. 学術図書 3. その他								
<p>(要旨) 昭和63年に「女峰」に「宝交早生」を交配して得た系統に、平成3年に「とよのか」に「濃姫」を交配して得た系統を平成9年に交配した。その中から品質が優れた系統を選抜し、平成16年3月に品種登録出願した。草型は軽度の開帳性で草勢はやや弱い。ランナーの発生数は多く、芽無し株は発生しない。花芽分化は、岐阜地域で9月15日頃である。収穫開始はポット育苗による促成栽培で11月下旬である。果梗の長さは短い。着果数は少なく、頂果房で10果程度である。果形はやや短円錐形で、平均果重は16.0gである。果皮は明るい赤色でつやが優れる。果実硬度は「とちおとめ」と同等の硬さである。果肉はなめらかで食感が優れる。糖度は9.2%とやや低いものの糖酸比は同等である。初期収量がやや少ないが、連続出蓄性に優れているため総収量は5,903kg/10aと多収である。病害抵抗性では、炭疽病、萎黄病並びにうどんこ病に対する抵抗性はない。葉に苦土欠症状が発生することがある。草勢が弱いため、11月中下旬からの4時間程度の電照が必要である。また、ジベレリン処理を行う。草勢が弱くなると、ガク枯れ果が発生する。</p>														
(キーワード) イチゴ、美濃娘														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		加藤克彦						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	Ebb & Flow方式栽培でのミニバラの葉面積の推定													
発表者名 (原著)	荒井健吾 ¹ ・干文進 ² ・加藤克彦・今井田一夫 ² ・福井博一 ^{1,3} (¹ 岐阜大農学部, ² 岐阜農技研, ³ 岐阜大院連合農学研究科)													
口頭	発表会名 (場所)	静岡大学静岡キャンパス												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2004	年	9	月	25	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類	==	1. 学術誌、 2. 学会フ ^o ロシ ^o テイ ^o グ、 3. 試験場報告、 4. 試験場コース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
(要旨) 複合環境制御システムを用いた自動化・省力化による大規模生産では、灌水は重要な管理技術であるが、様々な変化要因に影響を受けるため自動化することが困難な技術となっている。そこで、正確な蒸散量を改良ペンマン法によって推定し、これを基に灌水量を予測して灌水の自動化を図るため温度・日射量等の環境要因と葉面積の関係を検討した。その結果、春栽培・秋栽培とも積算温度・積算日射量が葉面積の増加に大きな影響を与え、重回帰分析を行った結果、2回目ピンチ後から栽培終了までについて秋栽培・春栽培それぞれの重回帰式が得られた。重回帰式から積算温度が積算日射量よりも葉面積増加を促進させる要因であると考えられた。また、分散分析の結果、実測値と重回帰式による推定値には高い相関が認められ、春・秋栽培とも本重回帰式により高精度に葉面積を推定できると考えられた。														
(キーワード) 灌水管理技術, Ebb&Flow, 葉面積推定														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名	越川兼行							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	イチゴ高設ベンチ栽培における培養液閉鎖システムに関する研究(第2報)													
発表者名 (原著)	越川兼行・安田雅晴 (: 発表者)													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成16年度秋季大会 (静岡大学)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2004	年	9	月	26	日						
誌上	誌名	園芸学会雑誌第73巻別冊2												
	巻号等	Vol.	73	No.	2	p.	415	~ p.		西暦	2004	年	9	月
	出版または発行元	園芸学会												
	分類 ^(注)	<u>3</u>	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他						
<p>(要旨)イチゴの高設ベンチ栽培「岐阜県方式」における栽培槽からの培養液の排出液をハウス外に出すことなく、循環させて栽培する培養液閉鎖系システムを開発したこと及び収量や果実品質が従来の掛け流し栽培と変わらないことを前年に報告した。 本報告ではそのシステム内での各部位(排出液、排出液処理槽、循環用原水、培養液等)のpH、EC濃度及び窒素濃度の1作通じての動態を報告し、従来の掛け流し栽培における培養液と同等に循環培養液の組成及び濃度をコントロールできることを証明した。</p>														
(キーワード)イチゴ、高設ベンチ栽培、培養液循環、閉鎖系システム														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名	猪原由久							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	イチゴ新品種「美濃娘」の特性													
発表者名 (原著)	猪原由久、越川兼行、安田雅晴													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成16年度秋季大会 (静岡大学)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2004	年	9	月	25	日						
誌上	誌名	園芸学会雑誌 第73巻 別冊2												
	巻号等	Vol.	73	No.	2	p.	402	~ p.		西暦	2004	年	9	月
	出版または発行元	園芸学会												
	分類 ^(注)	<u>3</u>	1. 学術論文					2. 学術図書						
		3. 講演・報告					3. その他							
<p>(要旨) 昭和63年に「女峰」に「宝交早生」を交配して得た系統に、平成3年に「とよのか」に「濃姫」を交配して得た系統を平成9年に交配した。その中から品質が優れた系統を選抜し、平成16年3月に品種登録出願した。草型は軽度の開帳性で草勢はやや弱い。ランナーの発生数は多く、芽無し株は発生しない。花芽分化は、岐阜地域で9月15日頃である。収穫開始はポット育苗による促成栽培で11月下旬である。果梗の長さは短い。着果数は少なく、頂果房で10果程度である。果形はやや短円錐形で、平均果重は16.0gである。果皮は明るい赤色でつやが優れる。果実硬度は「とちおとめ」と同等の硬さである。果肉はなめらかで食感が優れる。糖度は9.2%とやや低いものの糖酸比は同等である。初期収量がやや少ないが、連続出蓄性に優れているため総収量は5,903kg/10aと多収である。病害抵抗性では、炭疽病、萎黄病並びにうどんこ病に対する抵抗性はない。葉に苦土欠症状が発生することがある。草勢が弱いため、11月中下旬からの4時間程度の電照が必要である。また、ジベレリン処理を行う。草勢が弱くなると、ガク枯れ果が発生する。</p>														
(キーワード) イチゴ、美濃娘														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名	新川 猛							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	カキ '松本早生富有' の早期軟化の要因と 1-MCP の効果													
発表者名 (原著)	新川 猛・稲荷 妙子(岐阜女子大学家政学部)・尾関 健													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成 16 年度秋季大会 (静岡大学)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2004	年	9	月	25	日						
誌上	誌名	園芸学会雑誌												
	巻号等	Vol.	73	No.	別 2	p.	529	~ p.		西暦	2004	年	9	月
	出版または発行元	園芸学会												
	分類 ^(注)	<u>3</u>	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他						
(要 旨) カキ '松本早生富有' の早期軟化は、収穫時におけるポリガラクトナーゼ (PG) の活性が健全果実と比べて約 16 倍と極めて高く、PG の活性はエチレンに依存することから、その高活性は根域の過湿条件でのエチレン生成によるものと推察される。早期軟化果実に対してエチレン作用阻害剤 1-メチルシクロプロペン (MCP) を 1000 ppb で処理したところ、約 2 週間完全に軟化の発生を抑制した。また 1-MCP は、果実の PG 活性についても、その増加を抑制していることが判明した。														
(キーワード) カキ、早期軟化、ポリガラクトナーゼ、エチレン、1-メチルシクロプロペン														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名	米山誠一						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上											
題名 (原著)	背負い型送風式捕虫機による茶吸汁性害虫の防除効果検討												
発表者名 (原著)	米山誠一、宮崎昌宏1)、神谷直人 1)中央農業総合研究センター												
口頭	発表会名 (場所)	茶業技術研究発表会 静岡県島田市宮美殿											
	主催機関	日本茶業技術協会											
	発表月日	西暦	2004	年	11	月	18	日					
誌上	誌名												
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年	月
	出版または発行元												
	分類	==	1. 学術誌、 2. 学会フロンティング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他										
<p>(要旨)</p> <p>化学合成農薬使用量の削減技術を確立するため、背負い型送風式捕虫機(野菜茶業研究所開発機)のチャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマに対する防除効果を検討した。二、三番茶期において、背負い型送風式捕虫機の処理によりチャノミドリヒメヨコバイの被害防止効果が確認されたが、チャノキイロアザミウマでは効果が低く、処理時期、回数等の検討が必要と考えられた。</p>													
(キーワード) チャ 送風式捕虫機 害虫 防除効果													

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		松尾尚典						
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	岐阜県 水稲の育苗施薬による病虫害防除													
発表者名 (原著)	松尾尚典・堀之内勇人													
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	新農林技術新聞												
	巻号等	Vol.		No.	1699	p.	5	~ p.		西暦	2005	年	2	月
	出版または発行元	新農林技術新聞社												
	分類	<u>3</u>	1. 学術誌、 2. 学会フロンディング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
(要旨) 岐阜県は、水稲の初中期病虫害(ヒメトビウンカ、ニカメイチュウ、イネミズゾウムシ、いもち病)に対して長期残効型の育苗箱施薬剤が普及している。第2種兼業農家が多いことから今後、初中期病虫害全てに対応した長期残効型の育苗箱施薬剤を施した苗を購入する農家が増加すると考えられる。このため、これに対応した育苗箱施薬剤がますます増加すると考えられる。														
(キーワード) 育苗箱施薬、病虫害防除、水稲														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名	天野昭子							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	水田排水路中の植物プランクトンの発生活長について													
発表者名 (原著)	天野昭子													
口頭	発表会名 (場所)	日本農薬学会第30回記念大会 (東京)												
	主催機関	日本農薬学会												
	発表月日	西暦	2005	年	3	月	19	日						
誌上	誌名	日本農薬学会第30回記念大会 講演要旨集												
	巻号等	Vol.		No.		p.	60	~ p.		西暦	2005	年	3	月
	出版または発行元													
	分類	<u>2</u>	1. 学術誌、 2. 学会フロンディング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
<p>(要旨) 水稲作付け期間中に水田から流出する農薬が生物相に与える影響について調査するため、農業用排水路における植物プランクトンの発生活長について調査した。調査期間中に検出された農薬は、メフェナセット(5.8ppb)ベンチオカーブ(2.6ppb)、およびBPMC(0.3ppb)であった。水中より捕獲された植物プランクトンをその形態より属別に分類したところ、珪藻類(8種類・優占種Navicula)、緑藻類(9種類・Senedesmus)、藍藻類(4種類・Oscillatoria)であり、珪藻類が優先して生息していた。プランクトンの増加ピークは、5月下旬と8月上旬に認められたが、いずれも水田からの水の流入に大きく起因すると推測された。またその後の生息量の減少についても、人為的な水管理の影響が大きいと考えられ、流出農薬の影響は少ないと推測された。</p>														
<p>(キーワード) 農業排水路、珪藻類、緑藻類、藍藻類、農薬、</p>														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名	鈴木俊郎							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	カキノヘタムシガの合成性フェロモンによる交信かく乱試験													
発表者名 (原著)	鈴木俊郎**・栗谷圭一**・中秀司***・望月文昭****・Le Van VANG*****・土田浩治**・安藤哲***** (*岐阜農技研: **岐阜大: ***農環研: ****信越化学工業: *****東京農工大BASE)													
口頭	発表会名 (場所)	日本応用動物昆虫学会第49回大会(東京)												
	主催機関	日本応用動物昆虫学会												
	発表月日	西暦	2005	年	3	月	24	日						
誌上	誌名	第49回日本応用動物昆虫学会大会要旨												
	巻号等	Vol.		No.		p.	185	~ p.		西暦	2005	年	3	月
	出版または発行元													
	分類	<u>2</u>	1. 学術誌、 2. 学会フロンディング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
<p>(要旨)</p> <p>カキの難防除害虫であるカキノヘタムシガ(<i>Stathmopoda masinissa</i>)の性フェロモンが、E4,Z6-16:OAc、E4,Z6-16:OH、E4,Z6-16:Ald(以下OAc、OH、Ald)と同定され、OAcを主成分とした合成物に強い誘引活性があることが明らかになっている。そこで今回はOAc単体、OAc+Aldを成分とした2種類のディスペンサーを試作し、岐阜県のカキ園で行った交信かく乱効果試験の結果について報告する。</p> <p>2種類のディスペンサーをそれぞれ10aあたり30本処理した区および無処理区を各20a設け、「処女雌トラップ」「つなぎ雌」「被害果調査」により効果の確認を行った。その結果、OAc単体のディスペンサー処理区で高い交信かく乱効果および防除効果が認められ、OAc+Ald処理区ではさらに高い効果が認められた。</p>														
(キーワード) 合成性フェロモン、カキノヘタムシガ、カキ、交信かく乱														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名	渡辺秀樹							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	Pythium helicoides によるイチゴピシウム根腐病(新称)の発生と各種作物に対する病原性													
発表者名 (原著)	渡辺秀樹・堀之内勇人・棚橋一雄*・景山幸二** (岐阜農技研・*岐阜専技・**岐阜大流域研セ)													
口頭	発表会名 (場所)	平成17年度日本植物病理学会大会(静岡)												
	主催機関	日本植物病理学会												
	発表月日	西暦	2005	年	3	月	29	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類	==	1. 学術誌、 2. 学会フロンテイング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
<p>(要旨) 2002年7月下旬および2004年8月下旬に、岐阜県内のイチゴ苗生産ほ場で、下葉が黄化し萎凋枯死する被害が発生した。被害株の根は暗褐色水浸状に腐敗し、クラウンおよび葉柄基部にも病徴の進展が認められた。罹病組織から1種類の <i>Pythium</i> 属菌が高率に分離され、接種により病徴が再現された。本菌は乳頭突起を有する楕円形の胞子のうを形成し、蔵卵器の大きさは平均31 μm、内部に非充満性の卵胞子1個を形成した。蔵精器は主に異菌糸性、長い円筒形で蔵卵器に付着した。菌糸生育は10 から42 で認められ、最適温度は35 であった。さらに、rDNA-ITS領域のRFLP分析およびミトコンドリアにコードされているシトクロームオキシダーゼ 遺伝子の塩基配列から本菌を <i>Pythium helicoides</i> Drechsler と同定した。本菌によるイチゴの病害は未記載であることから、イチゴピシウム根腐病(Pythium Root Rot)と呼称したい。また、本菌の11科15作物に対する病原性について検討した結果、ミニバラ、カラシコエ、ポットマム、ガーベラ、ポインセチア、ダイズに強い病原性が認められた。</p>														
(キーワード) イチゴ、イチゴピシウム根腐病、 <i>Pythium helicoides</i>														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		堀之内勇人						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	植物生育促進菌類 <i>Fusarium equiseti</i> の処理時期と回数によるハウレンソウ萎凋病の防除効果													
発表者名 (原著)	・百町満朗* (岐阜農技研、*岐阜大学)													
口頭	発表会名 (場所)	平成17年度日本植物病理学会大会 (静岡)												
	主催機関	日本植物病理学会												
	発表月日	西暦	2005	年	3	月	31	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類	==	1. 学術誌、 2. 学会フロンディング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
<p>(要旨) 培養土を入れたペーパーポットに <i>F. equiseti</i> の孢子懸濁液10mlを播種時の1回処理と播種時と移植前日の2回処理を行った。18日間育苗したこれらの苗を病原菌密度10^4cfu/g soilに調整した汚染土に定植し、27日後に外観の発病を調査した。その結果、萎凋病の発病は無処理区で発病度が31.3だったのに対し、1回処理区と2回処理区の発病度はそれぞれ6.3と2.1だった。さらに <i>F. equiseti</i> の処理を播種時の1回、移植前日の1回及び播種時と移植前日の2回の3処理区を設定して同様の試験を行った。定植22日後の萎凋病の発病は無処理区の発病度が80.2であったのに対し、播種時の1回、移植前日の1回及び播種時と移植前日の2回処理区の発病度はそれぞれ54.6, 69.4, 38.9であった。以上の結果、<i>F. equiseti</i> の処理は移植前日より播種時に、また播種時と移植前日の2回処理により萎凋病の発病を抑制することが明らかになった。</p>														
(キーワード) <i>Fusarium equiseti</i> 、ハウレンソウ萎凋病、生物防除														